

各地の話題 — 神奈川県における植物防疫業務の取り組み —

神奈川県農業技術センター 鈴木 誠

歴史ある植物防疫所「病害虫情報」に本号から新たに「各地の話題」を紹介するページが設けられ、植物防疫に携わる各都道府県の紹介記事を掲載することになりました。その第1回目として、神奈川県が担当することになりました。これを機に、全国の植物防疫関係者間の連携がより一層密になれば幸いです。

神奈川県は関東平野の南西部に位置し、2,416 km²の県土に約891万人が暮らす全国でも有数の都市化の進んだ地域です。本県の農業は、全国平均と比較すると一戸当たりの農地面積は小さいながらも、高い技術力を生かしてトップクラスの土地生産性を維持しており、大消費地に近いという利

点を生かし、野菜や果樹等の生鮮食料の生産が盛んです。2006年4月1日からは新鮮で安全・安心な食料等の供給や、農業の有する多面的機能を提供する都市農業を持続的に発展させるため、農業者及び農業関係団体の主体的な取組、県民の理解と協力、県の施策の推進等を示した神奈川県都市農業推進条例を施行しました。

安全で安心な農産物の供給や、環境に調和する農業の振興のためには、植物防疫業務に携わる者の責務は重要であり、日々努力しているところです。神奈川県における植物防疫関係者は、農業技術センター農業環境研究部（施設及び露地野菜、落葉果樹等）、三浦半島地区事務所研究課（ダイコン、キャベツ、スイカ等）、足柄地区事務所研究課（カンキツ、キウイフルーツ等）、北相地区事務所研究課（チャ、中山間作物等）に研究員が配属されています。また、当センター病害虫防除部（病害虫防除所）では、発生予察事業や農薬耐性菌・抵抗性害虫の検定、病害虫の診断同定、農薬取締法に基づいた業務等を行っています。

近年、トマト黄化葉巻病やキュウリ黄化えそ

病、花き類やネギ類に被害をもたらす *Iris yellow spot virus* (IYSV) 等、微小害虫が媒介するウイルス病の発生が問題となっていますが、当センターでは、媒介虫の発生生態調査や発病条件、薬剤感受性試験等様々な対策技術に取り組んでいます。また、アブラナ科野菜を加害するナモグリバエの在来天敵に関する調査や、施設イチ

ゴにおける主要害虫に対する天敵農薬の防除効果、黄色高圧ナトリウム灯を利用したキャベツやチャ害虫防除試験、UVランプを利用したアザミウマ類防除試験等、環境と調和する技術開発も進めています。さらに、果樹カメムシに関する予察や防除技術、少量多品目栽培や住宅地に囲まれた

農地における農薬ドリフト対策にも取り組んでいます。

こうした中、温暖化や交通網の発達等によるものか、近年新たに発生する病害虫の種類が増えています。特殊報の数で見ると2005年度は7報、2006年度は4報、2007年度は準備中を含めて8報になる予定です。前述したようにウイルス病の確認が多い他、今まであまり問題とならなかった病害虫の発生（ナシのクロフタモンマダラメイガ・チャノキイロアザミウマ・炭疽病、アスパラガスのジュウシホシクビナガハムシ等）も見られています。さらに、2007年には南方系の昆虫ヤシオオオサゾウムシが確認されました。移植したフェニックスに寄生していたものと考えられますが、神奈川の地でも世代交代を繰り返すことが判明しています。既に、ツマグロヒョウモンやナガサキアゲハ、オオキンカメムシ等の発生は一般化しており、温暖化により、新たな病害虫の発生拡大が今後も危惧されます。そのためにも、絶えず病害虫の発生動向に注意を払い、新たな防除体系を築くことが重要と考えられます。



神奈川県農業技術センター本館（平塚市）